

徹底分析座談会

周恩来死後の

千両役者

中国外交劇の次の幕?



ジュネーブ会議に出席したときの周氏

周恩来という巨大な個性は、囲碁でいえば、奇手を連発して相手を茫然自失、賛嘆せしめる名人だ。その周なき後継外交の問題を衝く。

(文中敬称略)

松野 周恩来の死によって中国の内外政策がどういうふうに変わっていくか。鄧小平はずいぶん外交的にも活躍しているわけですが、周恩来とくらべるとどうしても対外的な面では逆ってくるんじゃないかと思う。周恩来が病院に入って出てこなくなっているから、やっぱり中国の外交は精彩がなかったような気がする。

中嶋 全体としては内政重視にならざるを得ないと思う。ただ、中ソ対立は依然として深刻な状況にありますし、ますますグローバルな国際政治の一翼をになっ

てくるわけです。そういう中で中国の様子を見ますと、最近はずいもしい得点を挙げていない。鄧小平演説に代表されるような第三世界論を打ち出して、みずから第三世界の中に身を置くという外交にして、第三世界が数だけを頼っているのは困ったもんだ、という意見が一部にあったりするし、あるいは第三世界の中でも産油国と非産油国の角逐があったりする。

出席者

- 伴野 朗 (朝日新聞 外報部)
 - 中嶋 嶺雄 (東京外語大 助教授)
 - 松野 谷夫 (アサヒ 編集長)
 - 吉田 実 (朝日新聞 前北京特派員)
- (出席者はアイウエオ順)

る。その中で中国は、アラブの石油闘争こそ第三世界の大きな武器だということ、全面的にサポートしてきたわけです。そういうふうで、中国外交は第三世界の中でも受け入れられていない面がある。同時に、社会主義圏に関していいますと、インドシナ半島が中国路線を完全に離脱したといっている。それによって相対的にソ連の影響力が非常に高まってきている。なぜ、中国はインドシナ半島の問題を重要視し、ベトナム戦争をあれほど支援したのに、こうも早くハノイと北京との亀裂が出てきたのか。そこには何か隠された問題があるのではないかとさえ思う。中国は六〇年代の前半、キューバを盛んにサポートしたが、そのキューバが完全に離反し、それに続いてこんどベトナムが離反してしまっ

た。この二つの喪失は中国にとつて非常に手痛い。毛沢東型外交にたつて非常に手痛い。こういうふうになると、中国はやはり外交問題でどう手を抜くわけにはいかない。アングラの問題に見られるように、中国が黙ってられない問題も出てくる。そこで外相の喬冠華の位置づけなんです。喬冠華は周恩来のもとにずっといたわけですから、周恩

来路線を受け継ぐんだという見方があるが、喬冠華演説を聞いたりして、単なる周恩來の事務官じゃないという気がする。周恩來ほどのスケールはないにしても、かなりしたたかな外交手腕を持った、場数も踏んできた人物で、しかも、周恩來よりラジカルな、原則主義者であると思う。だから、鄧小平と喬冠華あたりがコンビネーションを組むことによって、強い立場が出てくるんじゃないですか。

松野 たしかにそうですね。喬冠華というのは、最初は周恩來の高級秘書的な仕事をしていた人で、外交家としても周恩來の薫陶を受けているわけですね。ぼくは



日中共同声明調印式で (1972)

周以後の動きを見る場合に、鄧小平だとかの副首相クラスの人とともに、喬冠華という人を見なければならぬという気が非常に強くなる。

というのは、彼は周恩來の衣鉢をつくとだけじゃなくて、彼独自の外交的な信念も持っているし、外交政策も持っていると思うんです。それがかなり鄧小平と通ずるような気がする。

そういうことから考えると、中国外交は今後かなり柔軟な面よりも原則的な面が出てくるんじゃないか、という感じがするんです。中嶋 覇権問題なんかも、周恩來は直接タッチしてないですね。むしろ、韓念竜であるとか、喬冠華であるとかいうところで出てきた問題ですよ。

伴野 周恩來の特徴は、問題が行き詰まったときに発揮される能力ですね。彼のことはでいえば「小異を捨てて大同につく」という調整というか、必要なときには空っぽになることもできるし、問題の核心を的確につかむことが出来る。つま

り、日中平和友好条約を結ぶんだという核心に彼が触れた場合には、覇権でこんなにもつれないですむような措置がとられたんじゃないかと思う。

だけど不幸にして、あの問題が出てきた昨年二月ごろは、すでに周恩來は日中外交の第一線から退いていた、と思うんです。日本関係者との最後の会見は六月の藤山愛一郎だし、最後の外国要人の会見は、九月七日のルーミアア党

政府代表団です。無理をして、一月の第四期全国人民代表大会で長文の政府活動報告をやった反動ともいえますが……。とにかく、日中平和友好条約交渉について

鄧・喬「コンビ」の反覇権外交のゆくえ

中嶋 覇権問題では、鄧小平が非常に強いことを言っているんです。香港の「七〇年代」という雑誌に、覇権問題が非常に強く位置

つけてある。覇権主義というのは、内政的に資本主義を復活したソ連社会帝国主義が対外的にとる行動だということを定義づけてい

るのが鄧小平なんですね。それに見られるように、鄧小平、あるいは喬冠華というコンビネーションによって、反覇権外交が行われ



握手をかわす中ソ首相 (1964)

は、周恩來が出られなかったことが相当マイナスの作用をしていると思う。今後、このことは日中関係に微妙な影をおとすかもしれない。

ているような気がする。そうすると、周恩來と違った外交サイクルの中でこの問題が出てくるのではないか。ただ同時に、駐日大使の陳楚が一時帰国したまま全然帰ってきていないという事実がある。ゲロムイコ訪日という重要な時期にも帰っていない。こんなことはないはず。普通だったら考えられない。

日本国内に覇権問題があるとき

に大勢が不在ということは、ある意味で外交的な停滞が非常にあるわけですね。

そうすると、例の江青講話ですね。時々呼び返して教育しなければいけない、といっていることを思い出すけれども、中国の一連の外交に、いまわれわれのわかってない問題、あるいは鄧小平的なものを出すのか、周恩來的なものを出すのかということをめぐる、あるいはインドシナ半島に対する政策がうまくいかなかったことから、いわゆる革命外交に転じるのか、従来の路線を守るのかについてかなり何かあるのじゃないかという気がするんです。

それに関連して、一つの問題は北朝鮮との関係ですね。中国と北朝鮮の最近の関係では、少なくとも目に見えた動きは金日成訪中だ。あのときは、北京と平壤との間にはかなりの諒和があることが確認できた。その後、張春橋を団長とする中国代表団が夏ごろ行っている。このときは、北朝鮮の副総理が出てきて、中国一辺倒みたいな演説をしたが、その後、金日成が七五年中に訪ソできなかったということも含めて、このところソ連密着的なニュアンスを出している。

つまり、北朝鮮は非常に苦しい立場にあって、中ソ対立を利用してうまく外交的なメリットをはかっているのではないかと、中ソ双方ともお互いに牽制してしまうがゆえに、逆に双方から全面的な援助がもらえないという状況になっている。

喬冠華演説の中にこういふことばがあるんです。

「何であんなに歓迎するのか」という声もあつたけれども、それはいけない。もっと長い目で見なければダメだ。問題は、彼が反帝であるのはいけれども、反社帝であるかどうかを見ることだ――。

つまり、対ソ態度を見なければいけないということですね。中国のほうも金日成を全面的に信用しているとは思えない。

この十数年間を見ると、北朝鮮とのパイプになつた唯一の人物は周恩来なんです。彼がいなくなつたということになりますと、対北朝鮮政策にも揺れがでてくるかもしれない。

ということとは、そのリアクションとして、ことしあたりは平壤はかなりモスクワに近づくんじやないか。その一つの兆候として、この間フォードが新太平洋ドクトリ

ンを出したとき、中国は沈黙しましたね。これはむしろ内心の支持を表している。モスクワは反撃したが、ハノイと平壤が意外に早くそれぞれ反撃した。これは、ハノ

対ソ外交に微調整はありうるか

松野 周恩来は、人と会う場合に非常に人を引きつける技術を持っていた。交渉の場合、細かいところを煮詰めるやり方が非常にうまくつたということや、人に応じて、その個人的な経歴まで調べておいて、それで相手を引きつけている。

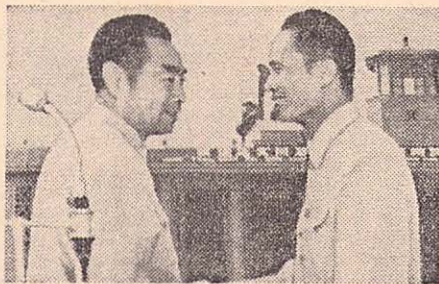
たとえば、日本から大相撲が行つたとき、横綱の琴桜が鳥取県出身ということまで知っていて、鳥取のことを話題にする。そんな周恩来がいなくなつてみると、やっぱり中国外交に影響するところはかなりあると思う。

そういう意味で、中ソ関係を見ると、鄧小平という人は中ソ論争当時でも非常に鋭い理論家だった。六三年にスースロフとやったときでも、中国がソ連と本当に話し合うつもりがあるなら、鄧小平じやなくて周恩来が行つただろうという声もあつたくらいで、中ソ関係は絶対によくなりっこないとい

いはいまモスクワを重視しているわけですからわかるにしても、北朝鮮がちよつとソ連のほうに揺れているんじゃないかという気がする。

思いますね。

伴野 それと昨年暮れのソ連の越境ヘリコプターの乗員釈放のときの雰囲気がちよつと違つた。不可抗力の越境というソ連の言いぶんを全面的に認めただけですね。そしてなおかつ三人の乗員を宴会に招いて、飛行場までわざわざ送つていって返した。この時期は、周恩来の死が決定的になつたころです。周死亡とこの対ソ緩和政策



ファン・パン・ドン氏と周氏 (1960)

とがどう結びつくかが問題です。果たして中ソの対立を解こうとするために投げたタマなのか、そうじやなくて単にそういう状況が生まれたのか。アメリカでは、他の共産圏での中国のイメージアップをはかるものではないかとの議論も出ている。

中嶋 現在の中ソ対立は、中ソ国境をはさむ軍事的な対峙の状況であるよりは、もっとグローバルな国際政治の中での対立になつている。つまり国境で凍結されている中ソ対立の時代は終わつて、中ソ対立の段階的な発達があつた。したがって中国にとっては、ヘリコプターの飛行士なんて大したことじやなくなつた。これから大きな勝負を打つために、小さなことは処理しておこうという感じじやないかと思うんです。

鄧小平の対ソ外交ですけど、中ソ論争の第一線に立つたのは鄧小平ですね。にもかかわらず鄧小平は文革のときに羅瑞卿戦略と同じ立場に立つたと思う。それをむしろ批判されたでしょう。

つまり、ベトナム戦線が激化しているときはソ連とも統一戦線を組むべきだ、それによつてアメリカ帝国主義をやっつけるんだという羅瑞卿戦略と実権派の考え方は

同じものだった。だからこそ、日本共産党や当時のベトナム労働党、あるいは朝鮮労働党と実権派はかなり近かつた。そこに日共と中共との分岐もあつたと思う。毛沢東のように、ソ連は全面的に敵だという対ソ観の間には、一つのミゾがあるような気がする。

そうすると、毛沢東が健在である中で鄧小平がリーダーシップをとつていく状況では、それほど大きな変化がなくても毛沢東といふカナメ石がなくなつて、鄧小平が全面的なリーダーシップを握つたときには、ソ連と論争はするけれども、政策的には結びつくときもある。それは日本共産党とも改善されるかもしれないという余地を残すものである。それが証拠には、ソ連のほうは、かつては周恩来に期待していたから、「毛沢東一派」といって、周恩来を名指して批判しなかつたのが、二、三年前の十全大会前後からは名指して批判したわけですね。やっぱり、鄧小平についてもその点で留保しているような気がするんです。

松野 しかし、中国がそこまで考え方を変えるというのは大変なことですよ。社会主義とは認めなくて、社会帝国主義と規定してしまつているのを、やっぱり同じ社

会主義体制の国だというふうにも
つていくのは、かなり問題がある
と思えますねえ。

中嶋 それ以上に民族的な対立
ですね。あの根深さはスラブ民族
と漢民族の永遠の宿命だと思っ
ます。ただ、ある意味では中国も

やがてソ連に近いような体制に内
部的にだんだんもつてくると思っ
んです。そういう次元では、そこ
までいく可能性も五分五分くらい
にあるんじゃないかと思うんです
がね。

岸野 ぼくは、ベトナム民族と
漢民族にそれを見るんですがね。
ベトナムの「中国離れ」は長い中
国王朝のベトナム支配という歴史

の血が培ったものがある。だから、
米國との戦争が続き、緊張し
た段階なら別だが、ベトナム統一



ハマーショルド氏と周氏

の。これは長期間
にわたる闘争です
よーといつて両手を
大きく広げてみせ
た。すでにソ連側は
鄧小平の台頭に警戒
心を高めていて、周
首相の死後、いや毛
主席なきあとも、簡
単な改善はありえな
いと思う。

が時間表にのぼり、第二次五カ年
計画がことしから始まるという段
階では、地金が出やすい。今後の
対インドシナ外交は、ポスト周外
交の一つの試金石となるような気
がする。

吉田 中国は、今年の元旦の三
紙誌共同社説でも「ソ連社会帝国
主義は今日、もつとも危険な戦争
の策源地」といって、中
ソ対立は、いわば社会主義革命と
建設の基本路線をめぐる「死活の
闘争」だ。今後簡単に変わるも
のとは考えられない。

北京にいたころ、ある西側の大
使館で独立記念日のパーティーが
開かれた際、中国側を代表して出
席した番冠華外相に「スパイ事件
などで中ソ関係が一段と厳しくな
りましたね」と尋ねてみた。すると

外相は「なんの、な
んの。これは長期間
にわたる闘争です
よーといつて両手を
大きく広げてみせ
た。すでにソ連側は
鄧小平の台頭に警戒
心を高めていて、周
首相の死後、いや毛
主席なきあとも、簡
単な改善はありえな
いと思う。」

松野 これからの中国の対米、
対日政策については、どういう具
合に変わっていくでしょうか。

中嶋 やはり、周恩来がいなく
なったことよって、中国外交に
おけるキメの細かさがどうしても
なくなりますね。ある意味で荒っ
ぼくなるかもしれない。

おそらく、覇権問題でも日中関
係でも、そういうことになるだろ
うと思う。

ただ、にもかかわらず基本的な
ベースはポイント・オブ・ノー・リ
ターンだと思う。アメリカにとつ
ても、だれが指導者になるにして
も当面、ソ連を戦略的な最大の相
手としていかなければならない、
というのは事実です。そうなる

というのは事実です。そうなる、
アジア・太平洋地域に限れば、こ
の間の新太平洋ドクトリンとい
うのは、アメリカのだれが指導者に
なろうと基本的な方向として出
てくると思う。つまり、日米関係を
中軸にしながら中国まで橋をわた
した米日中というもの——私はこ
れを太平洋横断的連携と呼ぶ——
をアメリカは推進するし、それは
中国にとつても好ましいものにな
るだろうと思う。

菊五郎をなくした損失度

伴野 周恩来の敷いた路線は大
きく変わりようがないと思う。周
恩来亡き周恩来路線ということに
なり、そのために選ばれたのが鄧
小平だと思う。だから、そういう
意味では劇的な大きな変化はな
い。だけどニクソン訪中のような、
劇的でみずみずしい外交、手

なろうと基本的な方向として出
てくると思う。つまり、日米関係を
中軸にしながら中国まで橋をわた
した米日中というもの——私はこ
れを太平洋横断的連携と呼ぶ——
をアメリカは推進するし、それは
中国にとつても好ましいものにな
るだろうと思う。

同時にアメリカは、ヨーロッパ
を舞台にしては、全欧安保会議か
ら今回始めるSALTⅡの交渉に
いたる、いわばデタントですね。
ヨーロッパ・大西洋地域における
対ソ関係が重要であるだけに、デ
タント外交を優先に進めるために
も二元的な政策をとるだろうと思
う。

そうすると、大きな国際政治の
波長の中から、日中関係も逃れら
れないわけで、この点での基本的
な変化はないような気がする。

いま日本には「周首相さえ生き
ていてくれれば」という甘さがあっ
た。「生前に日中平和条約を締結
すべきだった」という声も聞かれ
るが、中国の大きな世界政策の観
点からみても、周首相の衣鉢をつ
いで日本をますます重視してい
くと思う。

吉田 昨年十二月のフォード訪